

『#シカゴ7裁判 (The Trial of the Chicago 7)』(2020年、アーロン・ソーキン監督)をNetflixで視聴した。the Chicago 7と呼ばれた実在の被告たちを描いた。豪華俳優陣によるこのような知的でウィットに富んだ会話劇と演技合戦が楽しめる。最終陳述の場面は感動的である。第93回アカデミー賞にて作品賞、助演男優賞、脚本賞、撮影賞、編集賞、歌曲賞の6部門にノミネートされたが、受賞は逃した。一般公開に力を入れず、Netflixに版權を売り渡したという。

1968年8月28日、大統領選挙を控えたシカゴで民主党の全国大会が開かれていた。それに合わせて全国から反ベトナム戦争派の若者たちが集結し、集会やデモを繰り広げていた。そして、会場近くでデモ隊と警察が衝突し騒乱となり、数百名の負傷者を出す事件へと発展した。

約5ヶ月後にニクソン政権が誕生し、デモに参加した各グループのリーダー的存在だった7人(はじめは黒人もいて8人)が、暴動を扇動したとして共謀罪などの罪に問われ、法廷闘争となった。型破りなメンバーたちは、保守的な裁判長に反抗し、繰り返し法廷侮辱罪に問われる。中でもブラックパンサー党のBは弁護士をつけずに自らを弁護、仲間が警察の捜査で射殺された怒りをぶつけ、ついには身体を拘束される。温厚なDまでも、裁判長への反発から職員に暴力をふるってしまう。

弁護士のKは起死回生をかけて、クラーク前司法長官を証人として召喚する。この間、一人の仲間は毎日毎日、ベトナムでの死者を記録していた。クラークは当時の捜査で暴動のきっかけを作ったのは警察側であるという結論に至った事を証言する。検察側の弁護士のSは、それは前政権の時の判断だと応戦する。裁判の終盤、市民から録音テープが証拠として提出される。それはHが集会で、警察が友人に暴力をふるったことに逆上して聴衆に血を流せと扇動している声が記録されていた。証言に立ったHoは聖書を引用してヘイデンを弁護する。

裁判の最後、判決が下される前に、裁判長から短く簡潔な陳述を求められた。そこでHは、裁判の最中も続いているベトナム戦争で戦死した米兵の名前を次々と読み上げる(5千名近く)。裁判長を激高する。他のメンバーや弁護士、傍聴人までもが起立する。ついには検察官Sも立ち上がり死者への哀悼を示した。このような死者を無くすための集会やデモであったのだと視聴者は再認識することだろう。ベトナム戦争の米軍の最高司令官は、米兵を「ボディカウント(死者数)」としか認識していなかった。この裁判でHらは懲役5年の判決を受ける。エンドロールの字幕で、後に再審理となり、検察側は追訴を断念したことが知ら

される。

映画の背景は

第 36 代のジョンソン大統領在任時のアメリカ大統領選挙中に、シカゴでデモ騒動が起こり、第 37 代のニクソン大統領就任後に起訴・裁判という経過となる。本作のアメリカ国内での公開は 2020 年の 9 月。つまり、2 か月後の 2020 年 11 月に、4 年に 1 度のアメリカ合衆国大統領選挙を控えているというタイミングでの公開となった。この劇中の選挙にて当選するニクソン大統領は共和党の大統領で、映画公開時のトランプ大統領も共和党。さらに 2020 年は、5 月にミネソタ州で白人警察官がアフリカ系アメリカ人の一般人を死亡させた事件を発端とした、人種差別の抗議運動、BLM (Black Lives Matter) 運動が激化した年でもある。1968 年から、それ以上の差別が 50 年以上経った今も起こっているというのが現実である。

1968 年は世界的に反権力闘争が活発化した年であった。日本では、特に学生運動が盛んで、東京大学や日本大学を中心に学園闘争が展開された。この時期、学生たちはベトナム戦争への反対 (本作の背景) や日米安保条約改定への抗議を掲げ、大学キャンパスを占拠するなどの行動を起こした。

東京大学では、医学部のインターン制度廃止運動を発端に、学生たちが教授会の対応に抗議し、安田講堂を占拠した。これに対し、大学側は機動隊を導入し、学生との衝突が発生した。この出来事は全国の大学に波及し、多くの学生が授業放棄やストライキを行った。また、1968 年の反権力闘争は日本国内だけでなく、フランスの五月革命やアメリカの公民権運動とも連動していた。最終的に、東京大学の闘争は 1969 年 1 月に機動隊の介入によって終結し、この運動は日本の学生運動史において重要な転換点となった。この時期の反権力闘争は、単なる大学改革運動にとどまらず、社会全体の変革を求める動きとして記憶されている。

私は大学生なるタイミングがこの時期から数年ずれたため、闘争には参加できず、「遅れてきた青年」と自己認識してきた。